

あとがき



片川教諭



登里教諭

戦後郷土の歴史を研究する試みが各地に起り、郷土誌ブームの観さえ呈するに至つた。思えばそれは大切なことである。われわれの踏んでいる大地も、周囲の山に茂る樹木も、さては路傍に生命を宿す無心の草もすべては祖先の血と肉との結集によらぬものはない。現在は過去の上に築かれてゆくものである。このような意図から昭和二十三年九月、熊野中学校では「筆の都、熊野」誌を発行し、われわれの郷土の歩みをさぐつたのである。たとえ、それは小冊子に止まつていたとは言え郷土の生いたちを探さくし、それをつきとめることにおいて広く一般の注目をあつめる企てであつたことに間違いない。

二

だが、われわれは、それが総括的に郷土の生活を内包したものでなかつた点を反省し、一層深く広く掘り下げたものにしたたい熱願をもちつづけざるを得なかつた。われわれは、各方面の温い支持を期待し、折あるごとに、その関心を披瀝してきたのであるが、機漸くここに恵まれ、従来の内容を一新するものにまとめることができた。この意味において、われわれの祖先がどのような生活をし、またどのようにしてその苦難と戦つたかを多角的に解明したつもりである。もちろん、そうするためには、事実には忠実であろうとする良識を常に忘れることができなかつた。

三

とは言え、われわれの途は決して平坦ではなかつた。

何よりも先ず郷土に残された古文書による史料を重視したかつた。だが、多くは口伝による伝承に過ぎず、古文書は、ほとんど見出すことができなかった。このことは、文字能力のない祖先の生活程度を逆想させるには十分であるが、われわれには一つの大きな障壁であつた。良識記述を尊重しようとすれば、自然古文書史料によらないわけにはいかぬからである。それでも、こうした善意から、必要と思われる史料は、できるだけ、これを登載するよう配慮したつもりである。

また、史料を整理し、まとめる期間も、おのずから、限度があつた。常務を放てきすることはむろん許さるべくもない。多くは休日、特に夏休暇が充てられたが、それは暑熱の最も厳しい時期に相当する。このことも、多分に負担を感じさせる制ちゆうであつた。

四

ともあれ、本書はわれわれが祖先への呼びかけであり、また、祖先がわれわれへの励ましでもある。眞實を誤らないようにつとめたにかかわらず、そこには、あるいは、記述の過誤があるかもしれない。しかし、本書によつて、祖先の遺産をたたえ、これを一層繁榮させようとする責務を一般に期待することは、あながち、無様な望みではないと思う。もし、かりに、それが達成されるならば、それこそ、祖先に対する大きな感謝でなければならぬ。一木一草を流れる生命を知り、そこから更に、祖先と子孫とのつながりを感じとることに郷土誌の大切な目的があるはずである。

五

最後に、文責は一に熊野中学校片川、登里らの教諭にあることを附言しておかねばならぬ。それは、この事業が、困難なものであり、敘述に際して必ずしも万全の正確を保証し難いからである。われわれは、この冊子を更によりよいものにするため、今後の関心を怠つてはならないが、それにしても、じかに祖先の声を聞き、そこから、新しいわれわれの生活を進めてゆくすがは、幾分達成されたのではないかと思う。今、本書を手にして、われわれは心ひそかに、このことを喜んでゐる。